

日本初の「カーフリーリゾートUNZEN」がもたらす 「まちじゅう感幸（かんこう）」プロジェクト

- この提案書での「感幸（かんこう）」とは、
 - 従来型観光とは一線を画す意味で、「感幸」と記述します。
 - 地域の宝（光）を観るという意味で、観光という言葉は生まれたといわれています。
 - ◇ 「このときの地域の宝とは何でしょうか？」
 - 風光明媚な対象化される自然も宝かもしれませんが、その場で出会う人や、その地域の暮らしぶり、歴史や文化も、その地の「光」であるといえるのではないのでしょうか。
 - また、その「光」を見ること、出会うこと、触れることにより、訪れた人々は、幸せを感じます。
 - ◇ 「来てよかった。この町を訪れてよかった。」というふうには。
 - そんな想いを感じる体験を提供できると、訪れた人もうれしく、その姿を見て、受け入れた私達もまた、幸せに感じます。
 - ◇ 「ああ、よい出会いができた。いい、ご縁ができた。」と
- そんな、訪れる側も、受け入れる側も「幸せ」を感じる観光を「幸せをみんなが感じる観光」ということで、「感幸（かんこう）」と定義します。

はじめに

2003年「観光立国」を国の政策の大きな柱と位置づけて7年。観光の質的变化やお客様のニーズは激変し、団体で名所旧跡を巡る「旧来型観光」から個人、家族、小グループで、その地域ならではの食、歴史、文化、伝統などの体感を期待する「感幸旅行」へ変化し増加しています。

*たとえば、長崎市では「さるく」という町歩き型観光スタイルが提唱され、さるくガイドの方々は、ボランティアであり、お客様とのかかわりこそが、彼らのモチベーションの源とも言えます。これはまさしく、訪れる人も受け入れる人も幸せを感じる感幸旅行スタイルとして評価できると考えます。

これまで、旧来型観光産業を中心に営んできた雲仙・島原半島。明治期より外国人避暑地として栄え、「ハイカラさんの街」とも呼ばれ、戦後、新婚旅行のメッカとして、国内有数の観光地の一つとして栄えました。



外国人避暑地（ハイカラさんの街）時代のパーティ風景と、ハイカラさんを真似て雲仙を訪れた観光客（昭和初期）

昔、外国人は上海やマカオ～長崎(船)～茂木(徒歩)～小浜(船)～雲仙(徒歩・チェア一籠)と何日かけてでも雲仙を目指しました。また、ノーベル文学賞作家のパール・バック女史は1927年 初夏～秋にかけて4ヶ月間程、娘さんと二人、雲仙に滞在していました。その時を「まるで、毎日が楽園での暮らしのようで、ここでの生活は、私たちの人生において、とても充実し夢のような日々でした。」と記しています。

しかし、現在、かつての賑わいは消失し、地域の低迷化がすすんでいます。そこで、当時の雲仙への期待や希望を、今の時代にもう一度、取り戻したい。当時の雲仙の価値を、今の時代に合わせて、再提案したい！

その思いをこの企画に託し、ご提案いたします。

「あの頃の魅力を再発見、再発掘、再構築！」

「この状況から脱却するためには、何が必要か？」

ご提案

そのための核となるアイデアとして、

カーフリーリゾート UNZEN

を提案&実現したいと考えています。

カーフリーリゾートとは

一定のエリアに一般車両(ガソリン車)の進入を禁止するリゾート構想

例えば、スイスのツェルマットであるとか、世界の観光地で導入されているカーフリーリゾート。車社会の現代において車の進入を禁止したり制限したりする考えは驚きに値しますが、それでも観光地として成功を治めている事例は、数多く存在します。

日本では、まだカーフリーリゾートとして、実現している例はなく、日本で最初の国立公園である雲仙だからこそ、実現のインパクトは大きいものがあると考えます。最初の提案はいつも雲仙から。そんな思いを持っています。

国立公園であるが故にこそ、守るべきものがあると私は考えます。そこで、カーフリーリゾートの基本理念を4つ、提示いたします。

【カーフリーリゾートUNZEN 基本理念】

- ① 日本初の国立公園という歴史に鑑み、「環境」「自然」を大切にすること
- ② 日本を代表するリゾート地として訪れたお客様に快適に過ごしていただき、幸せを感じてもらうこと
- ③ もちろん、雲仙に暮らす私たちが、お客様と共に、日々の充実と幸せを感じることに
- ④ 雲仙の歴史や文化を生かすこと

この基本理念をもとに、地元住民自らが、地域の活性化（雇用創出と利益を生み出す）を実現させるべく組織づくり、仕組みづくりに立ち上がらなければなりません。

また、最大の特徴として、雲仙の町の中核をなす温泉街がコンパクトにまとまっており、エリア策定が比較的容易で、マネジメント効率が高いことが予想されることが上げられます。



● 雲仙小学校(●)～ゴルフ場まで約3km(国道57号線)

池ノ原園地(県道吹越線)～ 別所ダム(県道千々石線)～を規制区域とします。(—)

雲仙温泉街(●)は有明ホテル～ホテル東洋館までの約1.2km(R57)が中心街です。

具体的な5つのアクションプラン

1、環境を大切にすること→環境対応車の導入など

例えば、

カーボン(CO2)フリー化：二酸化炭素を排出しないハイブリッド車や電気自動車のシャトルバス利用。無料自転車などの普及。

環境に意識の高い人々の取り込みに力を発揮します。

■他地域の自治体の視察ツアーの呼び込みや、他の環境系プロジェクトとの連携などを想定します。

2、訪れたお客様に快適に過ごしていただくこと→楽しくなり、幸せを感じる仕組み

滞在時間が長くなることで、いかに楽しく滞在していただくか、質の高いホスピタリティを提供できるか、またリピートしていただくか、そのための工夫を凝らします。

→ 滞在型リゾートとしての地域の魅力の追求

例えば、

● エリアー帯を、「雲仙エコミュージアム」に

- 地域住民が何気なく普通に生活している空間こそが、自然の博物館となり、子供から大人、専門家まで、すべての人達のニーズにあった「遊びの場、勉強の場」となり、「自然や人の知らない何かの発見を通して、自分自身の素敵な部分を再発見できる。」「若いから学ぶことが出来るのではなく、学ぶことが出来る人が若い。」ということなどに気付く場となります。
- エコという言葉には、エコロジー（生態系）という意味も含まれます。湯けむりたなびくエリアに触れ、地政学的な意味での独自性を感じてもらったり、レトロな印象も含めて文化的、歴史的なたたずまいや事実、雲仙という町の持つ雰囲気も含めて、みなさまにもっと感じてもらう。それもまた、雲仙の魅力の一つと考えます。

3、雲仙に暮らす私たちも、快適に過ごせること→不便を快適に変える思考を手にいれる

現代社会の病理として、過度な利便性追及による、人間性の不在があります。阻害感と言ってもいいかもしれません。携帯電話を、もはや離せなくなってしまった現代人。雲仙は、車だけでなく、実は、ケータイ電話フリー（禁止）リゾートとして、打って出るのも一案かもしれません。ほんの10数年前までは、携帯電話などなかったのですから。（イギリスには、エネルギーのなかった時代の暮らしを体験できるミュージアムがあるそうです。）

車や携帯電話など、様々な文明の利器のおかげで、物理的に快適な暮らしに慣れすぎてしまった現代人の忘れ物を取りに来る場所としての、雲仙が、カーフリーを象徴として、実現できれば、人は、長期滞在を行う場所（リゾート）としての雲仙の魅力に気づくかもしれません。

今の時代、どこにいてもITで連絡が取れるという利便性は、逆に言うと、どこにいてもつかまるというデメリットと裏腹ではないでしょうか。実は、時間の制約からの解放こそが、一番の贅沢と言えるでしょう。

長期滞在型リゾートの実現が可能となると、

例えば、

- 観光客の増加による域内消費の向上
- スローライフ的な交流人口増加による地に足の着いた活気
- 地域に誇りをもって生活

住民すべてがカーフリーの趣旨を理解し、一人一人が自分の役割を果たします。全員が地域を誇りに思い生活している姿に来客者は地域のリアリティーを感じ、共感、感動します。来客者の言葉や行動を見て、住民は「自分たちのメッセージが伝わった」ことに、喜びを感じ、地域を引っ張る原動力となっていきます。

4、雲仙の歴史や文化を生かすこと→雲仙ならではの活用

単にお金をかけてイベントを実施するのではなく雲仙ならではの資源、素材を生かしたもののよさや特徴を戦略的に、しっかり生かしてゆきたいと考えます。

例えば、

- 地獄の地熱を活用した火山料理の復活や開発と、天然岩盤浴（昔、肉野菜を蒸していた）
- 滝をせき止めたプールの活用(天然の山水使用：清水でないと泳げない)
- 街じゅうの灯りを消して、冬の天の川観察会(星空観察のメッカとしての促進)
- 昔の乗り物を復活(チェアー籠、人力車、馬車など)



滝をせき止めてつくった天然プール（大正、昭和初期）



登山時、よく使われていたチェアーかご（明治期）



人力車と馬で来仙（大正時代）



雲仙に初めて登山したイギリス製の車（昭和初期）

<雲仙らしさを導くアイデンティティとして>

- 1、日本初の国立公園であること。
- 2、国立公園として環境保全がなされていること。
- 3、外国人避暑地として親しまれてきた歴史があること。
- 4、雲仙普賢岳噴火災害の記憶及び世界ジオパークを生かした教育的側面があること。
- 5、温泉があること。
- 6、キリシタン殉教地としての巡礼地であること。

5、感幸コンセプトによる、おもてなしのまちづくり

国内初のカーフリーリゾートを实行するためには、地域住民すべてがこのプロジェクトに参加することが条件となります。

そこで、プロジェクト実行に際しての、フィロソフィー(哲学)として

「まちじゅう 感幸」 を取り入れた、おもてなしの街づくり。

同時に、他の観光地との差別化をはかるための、

「雲仙らしさ、雲仙ならではの」 も追求します。

雲仙の地域住民は、普段の生活の中で、決して特別なことではなく、無意識のうちに、環境保全、生活環境維持などを行っています。これらは「日常の豊かさ」を表現していると思います。

そして、お客様には、お金を使わせるのではなく、時間を使っていただきます。現代において、時間こそが最大の財産だからです。お金があっても、時間を買うことはできません。そして、その時間を使っていただいて、地域の本質的な「宝、魅力」や地域の「豊かさ」を感じていただきたいと思います。

※宝とは、環境、生態系、自然、歴史、伝統、文化、生活等を保全(維持管理)しながら観光素材として利活用しているもの。

そして、お客様が、雲仙に暮らす我々の日常や、自然や地域固有の文化に触れたとき、「なぜ環境保全に力をいれているのか?」「何を一番大切に思っているのか?」など、気付いてくれると考えます。

それはとりもなおさず、地域を大切に思う姿でないでしょうか。自分たちが誇りに思える美しい街に住みたい。だから、環境をしっかりと考えた地域づくりを自然と行ってきたのだと。

そして、地域に暮らす私達が「地域を大切にすること」はとりもなおさず、「お客様の感動体験や幸せ体験：(感幸)を大切にしていること」につながります。私達が大切と思うものを、お客さまと一緒に体験できることが、最大の喜びと言えるでしょう。

この考えや思いが、お客様に対する、おもてなしの態度にも表れると考えます。

つまり、

「雲仙らしさとは」⇒「訪れてよし!住んでよし!の街」

そこで、地域の宝や魅力を、お客様に表現(解説)するガイドなどが必要となり、雲仙を知る(地域資源の発掘、情報収集)・考える(選定、商品化)・つなげる(伝える、情報発信)などの活動を開始します。そこから、住民自らが、地域を支える人財を育む組織づくり

仕組みづくりを確立します。そして、新たな雇用を生み出し地域が活性化します。地元では仕事がなく地域を離れていた人達（特に若者）が雲仙に戻り、街に必要な住民となり、地域に根ざした仕事、次世代につなげる事業を始め、街に必要な人財が集まりだし、街の機能を守る役割を担うようになります。

おもてなし（設え・装い・振る舞い）が出来る人が育つ。（人財育成）

地域の自主的組織が地域の振興を引っ張り、収益をあげる。（地域活性）



「ひとづくり&まちづくり」が確立し「訪れてよし・住んでよしの街」と認知されたとき、

まちじゅう感幸

が、完成します。

「雲仙らしさ」を活かした「雲仙ならではの」旅を体感、

「雲仙で暮らしているような旅」

を体験&満喫します。

おわりに

かつて、雲仙は九州の、いや、日本の文化の窓口でした。1590年、天正遣欧少年使節団はヨーロッパから印刷機や楽器を島原半島に持ち帰りました。（ヨーロッパ文化導入1号）明治期に入り、外国人に育まれた街には、日本初のパブリックゴルフ場が完成します。その後、雲仙のなかに、「九州ホテル」がオープンしました。九州ホテルと名付けたのはなぜでしょうか？雲仙は、九州を代表する場所だったのです。

私達は「温故創新」これらの歴史を想起し、現代と照らし合わせ、明確なビジョンをもって未来へ向けて動き出します。 また、近年地球温暖化や、酸性雨の影響で、秋の紅葉は色付きが、とても悪く、冬の霧氷においては1シーズンに4、5日しか見られない年が続いています。昔は天然のアイススケート場に变身していた白雲池は、現在、薄い氷すら張らない状況にあります。



20年前、普賢岳が爆発する以前の紅葉



仁田峠から妙見岳登山途中の霧氷



霧氷を近くから見ると「つらら」のよう



昔、天然のスケート場として活躍していた白雲池

そんな現状を打破するため、雲仙で受け継がれてきた遺産を大切に引き継ぎ、環境保全や生活環境維持活動は続けて行かなければなりません。地球規模からすると、とてもちっぽけな活動で無意味にしか見えないでしょう。しかし、「地域に誇りを持ち」、「決して諦めず」、「やれば出来る」と信じて、行動に移します。そして人は来る理由と目的さえあれば、どんなにアクセスが悪くても集まる。

大切な人のため、応援してくれる人のため

「これまで昔の物語を語っていたものを、これからは、自らが新しい物語を創り出す！」

そうゆう覚悟を持って立ち向かえば、夢は夢でなくなるのです。そして、
自分たちの新しい価値や付加価値を創り出せたとき、

「CAR FREE RESORT UNZEN」

が完成します。

そして活気を取り戻した雲仙は

「まちじゅう 感幸」

を確立させます。

2034年 3月16日、雲仙国立公園は指定100周年を迎えます。その時、雲仙は
世界でも有数なリゾート地のひとつとして、輝きをとりもどします。